

第十五回 三度目の危機を超えて（一）

私のアイデンティティが失われそうになったと感じた最初は、社会から置いてきぼりになったと感じた時だ。置いてきぼりという表現は正確ではないかもしれない。自分から選択したことだから。私は、大学四年の時に出会ったO市の歴史的環境を残す市民運動に十年近く関わっていた。その間、大学院に籍をおきながら大半の時間を市民運動に費やしていた。明治、大正、昭和初期と三代にわたってつくられてきた歴史的環境のど真ん中に計画された道路の見直しを求めた運動だが、都市計画決定済みで工事にも着手していた道路の見直しは困難を極めた。終盤には市民のおよそ半数にのぼる道路計画見直しを求める署名を集めるところまでいったのだが、結果的には歴史的環境の一部を残す妥協案で決着し苦い敗北感を味わうことになる。それまでの決着の見えない長い時間と闘っているうちに三十才も目前になり、その時に、例のものが襲ってきた。まわりを見れば同世代の友人たちは、皆、ひとかどの地位につき社会的実績をあげていた。私といえば、積み重ねたのは年だけという状態で、この先どうしたら良いのか、先の見えないくらい闇に覆われた感じであった。

その状況から逃れるために選択したのが、大学時代からの友人で市民運動を共にしてきたYと建築の設計と都市計画の事務所を起業するという道だった。二人ともさしたる専門知識や技術を学んだわけでもなく、大胆な選択であったと思うのだが。

ただ、いろいろな方の力をいただきながら、Yは主に設計の分野で、私は主に都市計画の分野で、それなりの成果をあげることができたのは、振り返ってみれば若さの力だったかと思う。それと、なまじ専門知識や技術を学んでこなかったのが良かったのかもしれない。後に、都市デザインに三次元コンピュータグラフィックを計画ツールとして導入することにチャレンジできたのも、世の中が都市計画に住民参加の必要性や、住民主体のまちづくりの重要性が認識され始めた時に、すでに長年の市民運動で身についた感覚が活かされたのも、まさに素人であったから純真に信じているところを進められたのだと思う。

事務所をYと立ち上げてから十五年ほどたち、ようやく仕事は認められるようになったが、その間、寝る間のないという表現がおおげさでもない状態が続いていた。それに二人とも要領が悪いのか、働けば働くほど借金が増えるという経営状態だった。Yは一途にものごとを突き詰めるタイプだったし、自分自身を絶対的に信じ、それと異なる人とは鋭く対立することもしばしばあった。それが彼の持ち味とわかりつつも、このままで良いのかと深く悩んだのが二番目の転機になった。

結果的に、事務所を二つに分け、私は多額の負債とともにこれまでの自治体との契約実績を引き継ぐかたちで、現在の事務所建て直すことにした。当然、経営的には負債の返済がキャッシュフローに重く響き薄氷を踏む思いであったが、なんとか徐々に安定し、スタッフにも恵まれ良い環境で仕事をすることができるようになったのだ。

